

から0.4gの範囲で唾液量増加がみられた。

A氏・B氏ではある程度の唾液増加がみとめられたが、現状では、マッサージによるものか、レモン水清拭によるものか、判断がつかない。そのためC氏の測定の際は、唾液腺マッサージ後レモン水清拭後、各々唾液量を測定することにした。また、A氏・B氏共に口腔ケア後の水でぬれた状態で唾液量を測定しているため、変化があまり現れないのでは、との意見もあり、C氏の後半は、口腔ケア後時間を置いてから、唾液量を測定し、唾液腺マッサージ・レモン水清拭を施行してみた。

C氏の唾液量の変化・前半。(唾液腺マッサージ後・レモン水清拭後に、各々唾液量を測定する)・唾液量が必ずしも増加しているわけではないが、レモン水清拭後のほうが変化が大きいように思われる。0.4~0.6gの範囲で増加がみられた。唾液腺マッサージにも効果があるようだが、増加量は0.1~0.2gの範囲である。レモン水清拭よりは効果は少ない。

C氏の唾液量の変化・後半。口腔ケアより時間を置いて、唾液量を測定し唾液腺マッサージ・レモン水清拭をおこなったもの。・レモン水清拭後は0.4g~1g以上唾液量が増加するなど著明な変化がみえる。対して唾液腺マッサージは唾液量が0.1g~0.4g増加している。レモン水清拭ほど効果的ではないが、すこしずつ着実に増加している。

【結果・考察】

今回、口臭や舌苔に関してはあまり変化が認められなかったが、唾液分泌の点では増加が見られた。特にレモン水清拭は、唾液量の増加に有効ではないかという感触を得た。口腔は患者さん外界からの感染源であり、今後も意識して口腔ケアを行っていきたい。

【参考文献】

2000年8月 日総研出版臨床オーラルケア
(柿木保明氏 編著
医歯薬出版「唾液と口腔乾燥症」

転倒防止への環境対策 ~職員への意識調査を通して~

札幌しらかば台南病院 病棟

○東 和弘 佐々木美幸 松井 浩子
日下こづえ 三上 初子

【はじめに】

当院は高齢、認知症、脳梗塞後遺症の患者様が多く、転倒、転落のリスクが高い状況にある。

H19年8月からH20年4月までの9カ月間に67件の転倒のインシデントがあり、2件の骨折のアクシデント報告があった。その中で病室内での事故が多かったため、環境整備に着目し基本的なことからの見直しと改善により、少しでも事故を減らすことは出来ないかと考え、スタッフへのアンケート調査を行うことにした。その結果、スタッフへの意識づけのきっかけとなったので報告する。

【研究方法】

期間 H20年4月~10月

対象 病棟スタッフ25名

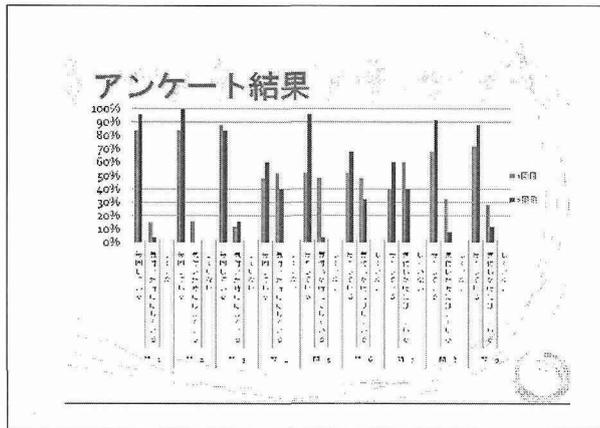
方法 環境整備に関するアンケート調査を2回実施。1回目の結果から課題を抽出しスタッフへの意識づけを行い2回目の結果と比較した。

アンケート内容は、①車椅子のブレーキ確認、②センサーマットのスイッチ確認、③センサーマットの位置確認、④ナースコールの位置、⑤車椅子の位置、⑥床の障害物の確認、⑦床頭台・オーバーテーブルの位置、⑧ベット柵の位置、⑨患者様の状態を把握した介助の9項目と、2回目のアンケート時に意見を記入してもらうようにした。

【結 果】

問1、2、4、5、6、7、8、9は1回目より2回目のアンケートの方が「毎回している」の回答が増えている。

問3の、センサーマットの位置確認では、1回目より2回目の方が「毎回している」の回答



が減っている。全問で「していない」の回答は1・2回のアンケート共にゼロであった。

【考 察】

アンケート調査結果から、スタッフから「意識するようになった」「今まで以上に気をつけている」「ちょっとした不注意が大きな事故に繋がることを痛感している」「忙しさの中で忘れていた、反省している」などの意見があり、スタッフへの意識づけがされた。アンケート調査後のインシデントは以前に比べやや減少している。

しかし、センサーマットのスイッチは全員が確認しているにもかかわらず、マットの位置が適切に置かれていない結果がでていた。これは、ベットサイドでの処置の際にマットをベット下に収納し、処置が終わったあとに元に戻すのを忘れていた現状がみられ、今回の結果になったのではないかと考える。現在はスタッフ間で協力し、マットが適切に置かれているよう確認しあっている。

当院の入院患者様の平均年齢は約80歳、認知症や精神、身体機能が低下している患者様が多く、転倒、転落アセスメントスコアシートではⅠが0%、Ⅱが37%、Ⅲが63%と転倒、転落の危険性が高い患者様がほとんどある。インシデントの中には、自分でできると思い込み、ひとりで行動した結果、転倒に繋がったケースも多く、今後の課題であると考えます。

本谷は「いつも右側にあるものが左側にあっ

たり、ポータブルトイレの位置が少しずれているだけでも、患者にとっては大きなリスクとなり得るという認識が重要となる」と指摘している。当院でも病室内での事故が多いことから、患者様にとって生活の場である病室内の環境整備は重要な役割である。アンケート調査後は、カンファレンスの充実化、スタッフ間の声かけ、情報の共有化などが多くおこなわれ、転倒に対する意識が高まったと考える。今後は個々の患者様にとって安心、安全な環境整備に向けての設備、物品の検討、更に意識づけを継続し、転倒予防に努めていきたいと考える。

【結 論】

アンケート調査によりスタッフへの意識づけとなり、スタッフ間での情報交換や意見交換が多く持たれるようになった。転倒予防の対策として、環境整備は患者様が安心、安全な入院生活を過ごす上で重要な役割のひとつであると再認識することが出来た。

【引用文献】

本谷 菜穂子：月間ナースマネージャー 2 (3) p47～53 2000

【参考文献】

竹内 可愛、他：北海道・東北地区看護研究学会集録Vol.FY13 p40～42 7転倒・転落のハイリスク患者に環境整備チェックリストを活用した効果

川崎 彰子；月間ナーシングVol.22 No.8 2002/7 p24～28 痴呆患者への事故防止対策と環境整備

石宇 あゆみ；エキスパートナース Vol.19 No.13 2003/9 p44～46 療養環境整備のポイント